

大学

アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2020.3.31 No. 62

Japan Association of College and University

Archives : Eastern Japan Division

目 次

・友田 昌宏「寺崎昌男氏講演『新制大学、それは何だったのか 一生誕にまつわる光と影、そして残した課題一』を聞いて」	1
・高橋 秀典「2019年度全国研究会に参加して」	3
・中西 祐悟「第117回研究会（電気通信大学）に参加して」	5
・齋藤 研也「千葉経済大学地域経済博物館見学会に参加して」	6
・全国大学史資料協議会 2019年度総会議事録・講演会記録	9
・全国大学史資料協議会 2019年度役員会議事録	10
・全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録	12
・全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録	13
・全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿	19

2019年10月16日 全国大学史資料協議会 2019年度総会・講演会

寺崎昌男氏講演「新制大学、それは何だったのか 一生誕にまつわる光と影、そして残した課題一」を聞いて

東京経済大学史料室 友田 昌宏

2019年10月16日、立教大学池袋キャンパスにおいて2019年度全国大学史資料協議会全国総会・講演会が開催され、私は東京経済大学史料室のスタッフとしてこれに参加した。大会テーマは「新制大学発足をめぐる各大学の動向—その資料と活用—②」、2017年度に続いてのテーマである。当日は、個別報告に先立ち、東京大学名誉教授の寺崎昌男先生に「新制大学、それは何だったのか—一生誕にまつわる光と影、そして残した課題一」と題してご講演いただいた。

以下、ご講演の内容を紹介し、最後に簡単

な感想を述べたい。まず、今回の研究会のテーマでもある新制大学というワード、今や死語になりつつあるようだが、寺崎先生はこれにつきいまだ生命力のあるものだと強調される。新制大学発足から70年、大学を取り巻く状況の変化、それにともなう大学改革にもかかわらず、大学の制度には、大きなところでの変化がないからだというのが、その理由である。したがって、今の大学はみな、新制大学のひとつであり、その歴史をたどることは、今の大学を考えるうえで重要だとされる。そのうえで、ご講演では副題にある通り、



講演する寺崎昌男氏

新制大学の光と影、そして、それを踏まえての課題を指摘された。新制大学発足時の日本はアメリカの占領下にあったが、アメリカの主導のもとに新設された新制大学は、同国の高等教育機関をモデルとした全く新しいタイプの大学であった。アメリカの大学改革を受け入れるにあたって、大学人のあいだでは反発もあったが、最終的に彼らはこれを受け入れ、それにより大学が直面する難局を乗り越えた。その結果、大学は成果を得たが、同時にいくつかの課題をも抱え込むことになったという。

まず、成果のほうからみよう。第一は、新制大学を設置するにあたってGHQが起案した「日本の国立大学編成の(再考せられたる)原則」(1948年6月ころ)で「各都道府県に少なくとも国立複合大学が設立されるべきこと」と定められたことである。それまでの旧制大学は、あくまで「国家ノ須要」のための学術研究と人材吸収のネットワークの構築を目的に配置されたものであったが、この原則はそこから離脱し、高等教育の機会均等化を目指すものであった。そして、それは財政削減という日本政府の利害とも一致していたという。

第二は、1946年に南原繁の主導で新制大学が「高等大学に続く四年制の機関」とされ、

それを前提に、先の「日本の国立大学編成の(再考せられたる)原則」において、各都道府県の新制大学に文理科(リベラルアーツ)と教育科(エデュケーション)の学部の設置が義務づけられたことである。大学でのリベラルアーツ教育は「民主社会のための市民形成」という理念、大学での教員養成は、「公教育の中の、公教育のために役立つ大学」という理念に基づくもので、大学と高等学校以下の教育機関との連続を保証した。

一方の課題である。GHQが日本に迫った数々の改革要求のなかで、大学が頑として固守したものがある。それが教授会の自治であった。GHQは大学をアメリカの州立大学に模してコミュニティとの関係を重視し、大学は地域の発展に貢献していくべきだと考えたが、これに対して日本の大学当局者は、大学を各学部が守るものとして地域からの影響を排除し、人事の母体である教授会の自治を堅持して譲らなかった。このことにより、大学はGHQの意向に引き回されることを回避できたが、そこに孕む問題は1960年代の大学紛争の際に表出した。すなわち、教授会自治の名のもとに、学生が被った不利益処分をいったいどこが保証するのかという問題である。

第二は、先にも挙げた地域社会との関係である。日本にはそもそも大学を地域とのかかわりにおいて考えるという土壌がなく、それは戦後においても引き継がれ、地域よりもむしろ世界との関係が重視された。第三は、新制大学院の独立性の問題である。日本の大学院は大学の附属機関と位置づけられ、今もって独立した機関という意識は希薄だが、このような状況で優秀な研究者を養成できるのが課題となっている。

私は大学史編纂に携わりながらもいまだ日が浅く、その方面の知識を全く欠くものだが、そういった者からしても、今回のご講演の内容は非常に明快で興味深かった。だが、新制大学発足から70年以上を経て、大学に大きな変化はないといっても、そこに実際に身に置く者にとって近年の大学改革にともなう大学の変化は決して看過しえないように思う。たとえば新制大学が教育の柱としたリベラルアーツだが、近年、実学重視の傾向からますます軽視されつつあるように見受けられる。これは重大な問題であろう。ついで、気になったのは地域貢献の問題である。目下、日本の大学では、地域貢献が大きな課題として急浮

上し注目されているとのご指摘があった。たしかに国際化とともに地域貢献をこれからの大学に求められる役割として挙げるべきだとの声は高い。しかし、前者に比して、大学に直接的な利益をもたらさない后者は、表看板あるいはアクセサリーの域にとどまっているようにも思われる。

大学がその存在意義を保持し生き残っていくために求められているのは、新制大学がかつて有していた大学本来の役割を取り戻すとともに、時代に応じた変化を遂げることなのだということを、今回のご講演を拝聴して改めて痛感した。

2019年10月17～18日 全国大学史資料協議会 2019年度全国研究会

2019年度全国研究会に参加して

日本大学企画広報部広報課 高橋 秀典

2019年10月17日（木）、立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルームで、標記の研究会が開催された。本年は1949年の新制大学発足から70周年に当たり、テーマは、一昨年の2017年度全国研究会に引き続き「新制大学発足をめぐる各大学の動向—その資料と活用—②」が取り上げられた。

立教学院展示館の豊田雅幸氏から、今回は①1948年に前倒しで認可となった大学の事例、②女子大学の事例、③旧制高校等を母体とする地方国立大学の事例についての3報告が準備されているとの発題があった。さらに、前回報告、前日の寺崎昌男氏の講演や立教学院展示館で開催中の企画展等も踏まえて、新制大学がどのような経緯で発足したのかを見つめ直す機会となればと述べ締めくく



総括討論の様子

られた。

第1報告：同志社大学同志社史資料センターの小枝弘和氏からは、「収蔵資料に見る同志社の新制大学構想」と題して、『百年史』編纂に際して十分に活用されなかった一次資料（理事会記録等）を論拠とする、事例①に関する報告があった。

同志社大学では、終戦後はキリスト教主義

の復興を掲げ、文学部神学科の神学部（旧制）への昇格を初めとする宗教教育の強化が図られた。

また、創立以来続くアメリカとの関係は、占領下にあつてより広まり、これまで繋がりもなかったアメリカ政府や軍との関係が深まった。新制大学設置に際しては、当初、申請する全学部（ジュニア・カレッジ（教養）2年とシニア・カレッジ（専門）2年を置く構想があつたが、大学設置委員会の審査には反映することなく、理念と現実の乖離があつた。しかし、学内のみで通用する枠組みで教養学部が設けられた。

第2報告：日本女子大学成瀬記念館の岸本美香子氏からは、「新制大学誕生—日本女子大学の場合」と題して、事例①②に関する報告があつた。

成瀬仁蔵は、女子教育を通じて社会を変え、学問分野としては家政学を重視した。しかし、大学令による大学設置申請に際して文部省は、家政学は大学の学問水準としてふさわしくないと認可に反対した。

新制大学設置に際しても、家政学部設置に文部省は難色を示したが、CIEのルル・ホームズは、その学問水準を高く評価した。1948年3月、日本女子大学（家政学部・文学部）の新制大学設置が認可された。この間、第4代校長井上秀は公職追放により辞任したが、校内に起居し、その影響力は残したままだった。

第3報告：富山大学アーカイブの入江幸二氏からは、「新制富山大学の発足をめぐって」と題して、前身校の成り立ちに触れた上で、事例③に関する報告があつた。

富山大学は、旧制官立の富山師範学校・富

山青年師範学校・富山薬学専門学校・富山高等学校・高岡工業専門学校（高岡経済専門学校から転換）の5校が母体となつて創設され、前身校に旧制大学は含まれていない。新制大学設置に際しては、総合大学案と4単科大学からなる連合大学案があつたが、最終的に4学部（文理・教育・薬学・工学）の総合大学案で申請書が提出され、認可された。

キャンパスは前身校を引き継ぎ分散し、教育学部分教場を含め富山市（3ヶ所）・高岡市・立山町の5ヶ所となった。GHQの富山県軍政部はキャンパスの集中を勧告したが、富山市と高岡市の地域性の問題もあり、現在も分立は続いている。

総括討論：フロアや司会者から、新制大学設置関係資料の保存状況、旧制から新制に変わった際の当事者の意識変化、前回課題として残った入試内容等から旧制大学と新制大学の質的变化はみられたか、自校史教育の実施状況は等の質問が寄せられた。これらに関して意見交換がなされ、一部は引き続き課題を残して終了した。

今回の報告を聞いて、1年前倒しとなった大学がキリスト教系や女子大学に偏っていたことは、あきらかにGHQとの関係が見て取れて非常に興味深かった。また、日本女子大学は、創立以来の「家政学」教育へのこだわりが、大学認可に際して優先していたことに、私立学校としての矜持が感じられた。富山大学に関しては、前身校の富山高等学校や高岡高等商業学校に地元財界等から高額な資金が寄せられていたことは、旧制大学設置申請時の供託金集めに苦勞した私立大学に身を置く者としては、地域と官立学校、ひいては新制国立大学との関係の深さを感じさせられた。

総括討論からは、新制大学設置に関して解

明すべき事柄はまだ多く残されており、同一事例で、複数の大学を比較してみることも検

討すべきではないかと思われた。

2019年12月19日(木) 研究会

第117回研究会(電気通信大学)に参加して

東海大学学園史資料センター 中西 祐悟

全国大学史資料協議会東日本部会の第117回研究会は、2019年12月19日(木)14時40分から東京都調布市の国立大学法人電気通信大学で開催された。同大学の副学長兼I類(情報系)教授で博物館・UECコミュニケーションミュージアムの館長を務める由良憲二氏が「電気通信大学のあゆみ・UECコミュニケーションミュージアム設立の経緯と活動」と題して講演。その後、ミュージアムを見学した。

講演の前半では、電気通信大学の創立から、今日までの歩みが詳細に説明された。20世紀初頭、欧米列強と同様に日本でも、船舶の数、それに搭載する無線設備の数が急増し、無線電信従事者を大量に養成する必要が生じた。これに応じるため1918年12月、東京市麻布区板倉町に創設された「無線電信講習所」が、電気通信大学の起源である。戦中・戦後期に無線電信従事者の需要はさらに増大。無線電信講習所は改組や改称、移管、移

転を重ねて1949年に「電気通信大学」として新たなスタートを切ることになった。

この時、電気通信大学は1学部(電気通信学部)の下に3専攻を置く体制だったが、通信とその周辺技術の日進月歩の発展に沿うように、学科の構成や名称は劇的かつ柔軟に変遷していった。1973年度のピーク時には11学科まで増え、2019年度現在は1学部3類1課程となっている。短期大学部や大学院なども加えるとその移り変わりは複雑を極めるが、由良氏の説明は終始流暢であった。

そんな氏の言葉が突然、途切れた。違和感を覚えたのか、スクリーンに映したスライドと『電気通信大学100周年記念誌』(2018年3月刊)を見比べた後、レジュメの修正箇所が示された。記念誌の有用性もさることながら、些細な食い違いを見逃さない、由良氏の眼光の鋭さが強く印象に残った。

講演の後半ではUECコミュニケーションミュージアムについて詳述された。同ミュージアムの前身「歴史資料館」は1998年、電気通信大学の創立80周年を記念して学内に開館した。有山正孝学長(当時)は同館の目的と目標を次のように明示している。

「(前略)本学の歴史と現状、そして将来の構想をビジュアルに展示することを目的とする。歴史資料館での展示を通じて、先人の情熱と努力、それに多大な労苦に敬意を表しながら、急速に進展する技術革新と多様に変貌



由良憲二氏による報告

する情報化社会の中であって、常に本学の存在意義を明らかにしたい（後略）」（一部読点は筆者が追加）

過去と現在だけでなく、未来をも見据えて活動することを明言し、博物館・ミュージアムの活動を通じて母体である電気通信大学の存在意義を照射せんという、同館への期待を込めた、学長として決意表明であったのだろう。これはすべての大学の付置展示館でも目指すべき、普遍的な目標と言えるもので、ここに改めて掲げさせてもらった。

同館は開館 10 年目の 2008 年に学内の現所在地に移設、現名称に改め、展示方法も学生や一般に向けてさらに分かりやすく工夫するなど、一新したという。

2019 年度現在の同館の運営体制は、由良館長をトップに、大学の学術情報課に所属する事務補佐員が 2 名。また、かつて大学や企業などに勤務し知識と経験を積んだ面々が「学術調査員」（11 名）、「特任学術調査員」（10 名）という肩書で所属し、来場者へ展示の解説などを行っているとのことだった。

講演に続き、参加者は 3 班に分かれ実際にミュージアムを見て回った。学術調査員らの丁寧な解説付きで、である。数々の貴重な展示品の中でも必見は、「カシオ製リレー式計算機 AL-1」だろう。加減乗除やルートの計

算を問い掛けると、しばらくカタカタと小気味よいリズムを奏でた後、実に得意そうな面持ちで解答を示してくれる。愛くるしくて我が家にも 1 台欲しいくらいだが、110 × 113 × 42cm というサイズ（本体のみ）では、置き場に困ってしまうので断念せざるを得なかった。

なお、このリレー式計算機は、学術調査員らの修復作業によって動態展示が実現し、今も維持されている。その功績を讃えるように、2016 年度には情報処理学会から情報処理技術遺産に認定された。同館の強みはこうしたスタッフの技術であり、献身的な姿勢であろう。他が簡単に真似できそうにない、実に羨ましい体制である。

最後に、参加者からの「校名に地名が入っていない国立大学は珍しいが」という質問に対する、由良氏の回答を紹介したい。

「地域に根差した活動も展開しているが、通信を扱う教育機関であり、日本全国に開かれた大学を創ろうという精神に基づいた校名。小さくとも光る大学を目指している」

誰もが、どの大学もが、キラリと光る個性を持っている。その輝きをいかに持続させ、磨きをかけていくか。今回の研究会で参加者は、そのヒントを掴んだはずだ。

2020 年 2 月 3 日（月） 研究会

千葉経済大学地域経済博物館見学会に参加して

神奈川大学資料編纂室 齊藤 研也

2020（令和 2）年 2 月 3 日、第 118 回東日本部会研究会が千葉経済大学において開催された。同大学は千葉県千葉市稲毛区に本部を置く経済学部のみ単科大学である。

はじめに千葉経済大学地域経済博物館館長の菅根幸裕氏による「千葉経済大学地域経済博物館と地域連携博物館実習」と題したお話をうかがった。ユーモアを交えた語り口で、

まず千葉経済大学の成り立ちから大学開学と同時に設けられた同博物館の前身である地域経済資料室のこと、博物館学芸員課程の設置と同博物館の開設、そして博物館相当施設の指定までが語られた。学内の認知を得るための苦勞、限られた予算や設備のなかでの運営など、同博物館を一線で盛り立ててきた氏ならではのエピソードが細部にわたり込められたお話であった。講演のもう一つの柱は、千葉経済大学という「経済」大学の「経済学・経営学」専攻の学生にとっての博物館資料の活用とは何か、さらにいえば同博物館とそこで行なわれている学芸員課程の意義は何かということであった。これらの回答の一つとして紹介されたのが、同課程での調査実習の成果を地域経済の活性化に活かそうとする取り組みである。千葉経済大学はもともと千葉県の地域経済に特化した様々な調査研究を行ってきた。そのため学芸員課程で行なわれるたとえば経済史の調査でもそれらを現在に活かそうとすることは自然の流れであったように思われる。歴史を地域経済の活性化に繋げるということである。こうした試みがこの博物館と学芸員課程の特徴であるという。履修する学生は古文書調査や民俗実習を通して得たことを地域に還元するため、自治体に向いて活性化のためのアイデアを「売り込む」ことも行なっている。そのアイデアがすべて採用されるということはもちろんないが、学生自身による担当者との直接の交渉は「学芸員課程」の枠には留まらない教育効果を生んでいるように感じられた。講演を拝聴したのち、場所を移して開催中の特別展示「波打ち際の宝石たち—D・M・ギルフォイルの上総興津浜で二十年にわたる陶片の蒐集—」を観覧し、次いで資料の収蔵スペースや収蔵資料



展示施設の説明をする菅根幸裕氏

とキャンパス内にある千葉県指定有形文化財「旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築」の見学を行なって散会となった。

今回の研究会で印象に残ったことは次の二点である。

一点目は講演のなかで指摘された博物館での活動を地域経済に活かそうとする試みである。これは今般なされた博物館法第 19 条の改正の問題と無関係ではない。このことによって今まで以上に博物館と地域が様々な点で関わりを持つ可能性が出てきたのである。これまで公立の図書館、博物館、公民館などの社会教育施設は当該の教育委員会が所管していた。しかし改正によって、まちづくりや観光など他の行政分野と一体となった活動が地方公共団体において効果的と判断されるのであれば、所管を地方公共団体の長に移管できるようになったのである（「地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律」令和元年 6 月 7 日公布）。こうした改正は、人口の減少時代において地域における社会教育施設の在り方を再考するなかでなされたが、これは当然、まちづくりや観光を優先し客受けがよい博物館運営になりかねない危惧が生じよう。菅根氏はこうした危惧も承知のうえで、この問題を「建設的」にとらえ、文化財部門

よりも潤沢な予算を持つたたとえば「観光商工課」などと博物館の連携は可能か、実習に組み込んでいるのである。このような連携に学生は概ね違和感を持たないようである。この改正には賛否はあるが、新しい動きへの一つの対応として印象に残った。

二つ目は「旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築」を見学して感じた戦争と地域との関係についてである。千葉県は台地と低地の割合が約六割を占め、その台地は県北部にまとまった形で存在する。下総台地である。その下総台地は首都東京に近く、平坦で広いので戦前には多様な軍事施設が置かれた。大学史のなかでも学校教練の野外演習で出向く富士裾野の板妻や駒門などと並んで、習志野（千葉県習志野市）の地名を目にすることは多いだろう。菅根氏の講演でも触れられた通り、千葉は「軍都」であった。なかでも施設跡を見学した鉄道聯隊がここに設置されたことは特筆されるものである。鉄道は戦地で兵員や物資などを輸送するのに欠かせない。その鉄道を敷設し、運転、修理などを行なうのが鉄道聯隊であった。テーマ曲も著名な映画「戦場にかける橋」で描かれた泰緬鉄道の建設はこの鉄道聯隊の仕事である。鉄道聯隊は全国でも千葉と習志野にしか置かれなかった。これは鉄道敷設の演習に適した平坦で広い土地を確保できる下総台地の特性と、千葉県の鉄道は半島性ゆえに基本行き止まりで長距離輸送を担う主要路線ではないということからこの点も演習に好都合と考えられたようである。ちなみに筆者は、大学から最寄りの西千葉駅を出て船橋駅から東武野田線に乗りし帰路についたが、その先にある柏から野田間は鉄道聯隊の協力で敷設されたものである。千葉県にはこのほか鉄道聯隊との関わりが深い鉄道が多数あると

いう。千葉県の鉄道網の整備に鉄道聯隊が果たした役割は大きかったといえよう。見学した施設跡は鉄道聯隊の修理工場に使われ、明治期に建てられた貴重な煉瓦建築である。その当時の煉瓦建築の構造を知るうえでも重要な資料になっている。こうした軍用地と大学のキャンパスが関わりをもつ事例はこれまでの研究会でもいくつか見てきた。軍用地に適した広く平坦な土地は大学キャンパスにも適するはずである。様々な大学史の切り口が想像できる有意義な研究会であった。

参考文献

- ・文部科学省ホームページ「第9次地方分権一括法（地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律（令和元年法律第二十六号）による社会教育関係法律等の改正（令和元年6月）」
https://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1417789.htm
- ・土田宏成「下総台地の軍事化」（荒川章二編『軍都としての帝都 関東』地域のなかの軍隊2、吉川弘文館、2015年）

全国大学史資料協議会
2019年度総会議事録・講演会記録

日時 2019年10月16日(水)
14時00分～14時50分
会場 立教大学池袋キャンパス
太刀川記念館3階 カンファレン
ス・ルーム

出席会員<東日本部会>

愛知医科大学 学習院
神奈川大学 慶應義塾
皇學館大学 國學院大學 国士館
自由学園 上智大学
女子美術大学 聖心女子大学
専修大学 創価大学
大東文化大学 拓殖大学
中央大学 帝京大学 東海大学
東京経済大学 東京農業大学
東北学院 東北大学
東洋英和女学院 東洋学園大学
東洋大学 日本女子大学
日本大学 法政大学 北海道大学
武蔵野美術大学 明治大学
立教学院 立教女学院 立教大学
立正大学 早稲田大学
阿部武司 古俣達郎 齊藤浩次
谷本宗生 中村青志 西山伸
橋本久美子 林慎一郎 細見大作
北村和夫
<西日本部会>
大阪女学院 大阪市立大学
大阪大学 大谷大学 関西大学

関西学院 京都産業大学
近畿大学 甲南学園 神戸女学院
常翔学園 西南学院 天理大学
同志社大学 梅花学園 広島大学
福岡女学院 福岡大学 桃山学院
立命館 龍谷大学
東日本部会= 46 会員 63 名
(内訳: 36 大学 53 名、個人 10 名)
西日本部会= 25 会員 27 名
(内訳: 21 大学 24 名、個人 3 名)

総計= 71 会員 90 名

(内訳: 61 大学 77 名、個人 13 名)

欠席届提出会員

東日本部会= 15 会員

西日本部会= 18 会員

司会 日本大学 松原太郎氏(全国大学史
資料協議会東日本部会事務局)

会場校挨拶

立教大学副総長 大山秀子氏

開会挨拶 関西大学 伊藤信明氏(全国大学
史資料協議会会長校)

議長選出 議長 佐伯裕加恵氏(神戸女学院)

副議長 永藤欣久氏(東洋学園大学)

総会の成立

議事に先立ち、東日本部会事務局(日
本大学・松原太郎氏)より総会が成
立することが確認・報告された。

議題 (1) 2019年度役員会の報告について
東日本部会事務局(立教学院・豊田
雅幸氏)から本総会に先立ち開催さ
れた全国役員会での審議内容が報告
された(全国役員会審議内容は全国

役員会議事録を参照のこと。

(2) 2019 年度東・西日本部会事業
計画報告

東日本部会事務局（立教学院・豊田雅幸氏）、西日本部会庶務校（関西学院・魚住英子氏）から、各部会事業計画書に基づいて本年度の事業計画が報告された。

講演 寺崎昌男氏（東京大学・桜美林大学・立教大学名誉教授）

演題 「新制大学、それは何だったのか
— 一生涯にまつわる光と影、そして残した課題 —」

〔概要〕 2019 年度講演会は、寺崎昌男氏（東京大学・桜美林大学・立教大学名誉教授）による標記講演が行なわれた。はじめに新制大学を考えるにあたり、基本前提として次の二点を指摘された。一つに、70 年前に誕生した後新しい大学は生まれておらず、現在まで「新制大学」は続いていること。もう一つに、占領期という特殊な状況下で発足しながらも当時のリーダーたちは難局と対峙し、現在まで長く続く大学システムを創設したということ。この二点は新制大学の一定の成功を示すもので、多くの課題を残してはいるものの、新制大学そのものは否定されるべきものではない。占領期という時代は新たな大学の発足において多くの課題を与え、課題も残した。資料を提示

しつつ、具体的にどのような難題に直面しそれを乗り越えたのか、欧米の大学モデルを選択しながら旧制期とは異なる「新しいかたちの大学」が日本全国に設立されていった様子を説明された。今後の個別大学における資料調査への期待を述べつつ、講演は締めくくられた。（浅沼薫奈）

見学 立教学院展示館
全国大学史資料協議会東日本部会創立 30 周年記念展／立教学院展示館・第 6 回企画展「『新しい大学』の誕生—今日の大学の原点をさぐる—」
情報交換会

見学会終了後、立教大学池袋キャンパスセントポールズ会館において情報交換会を開催した。司会は専修大学の瀬戸口龍一氏が行った。開会挨拶は東日本部会会長校の伴瀬利江氏（明治大学）が、乾杯の音頭は西口忠氏（桃山学院）がそれぞれ務めた。閉会の辞は会場校の豊田雅幸氏（立教学院）が行った。

全国大学史資料協議会
2019 年度役員会議事録

（第 185 回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会）

日時 2019 年 10 月 16 日（水）

12 時 30 分～ 13 時 00 分

会場 立教大学池袋キャンパス

太刀川記念館 3 階 カンファレン

ス・ルーム

出席 (東日本部会)

学習院 (監査委員)、神奈川大学 (会計委員・運営委員〈ウェブ担当〉)、
國學院大學 (運営委員・運営委員〈叢書・会報担当〉)、淑徳大学 (運営委員)、
専修大学 (副会長・監査委員)、大東文化大学 (運営委員・〈叢書・会報担当〉)、
帝京大学 (運営委員)、東海大学 (会計委員)、東京経済大学 (運営委員)、
日本大学 (事務局)、武蔵野美術大学 (副会長)、明治大学 (会長・運営委員〈ウェブ担当〉)、
立教学院 (事務局)、古俣達郎 (運営委員)

(西日本部会)

大阪女学院 (幹事校)、大阪大学 (会報校)、関西大学 (部会長校)、関西学院 (庶務校)、同志社大学 (副庶務校)、
広島大学 (HP 担当校)、桃山学院 (監査校)、立命館 (会計校)、古野貢

司会 松原太郎氏 (日本大学)

議事 (1) 2019 年度総会・全国研究会の運営について

東日本部会事務局 (立教学院) から、配布資料に基づき、総会・全国研究会の日程・役割分担が確認された。

(2) 2019 年度の東西両部会の共同事業について

①研究叢書について

西日本部会会報校 (大阪大学) より、

西日本部会担当の研究叢書第 20 号を発行したことが報告された。研究叢書第 21 号の編集は東日本部会が担当し、2020 年度内に刊行すること、参加記 3 名分 (東日本部会 2、西日本部会 1) を掲載することが確認された。

②東日本部会創立 30 周年記念事業について

東日本部会事務局 (日本大学・立教学院) より、協議会ホームページに会員校の紹介ページを開設したこと、立教学院展示館において展示を開催したことが報告された。

③ 2020 年度総会・全国研究会について

西日本部会庶務校 (関西学院) より、2020 年度総会・全国研究会について、関西圏 (京都または兵庫) での開催を検討している旨の報告がなされた。

(3) その他

大阪大学・菅氏より、2021 年に企業史料協議会が創立 40 周年を迎えるのにあたり、共同事業の申し入れ等がなされる可能性がある旨、報告がなされた。

全国大学史資料協議会
東日本部会幹事会議事録

第 186 回全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

日 時 2019 年 10 月 16 日 (水)
13 時 00 分～ 13 時 15 分

会 場 立教大学池袋キャンパス
太刀川記念館 3 階 カンファレン
ス・ルーム

出 席 神奈川大学 國學院大學 大東文化
大学 帝京大学 東海大学 東京経
済大学 日本大学 武蔵野美術大学
明治大学 立教学院 古俣達郎

議 題 (1) 2019 年度総会ならびに全国研
究会について
・事務局 (日本大学・立教学院)
より、総会・全国研究会のスケ
ジュール及び役割分担が確認され
た。
(2) 2019 年度研究会について
・今後開催予定の研究会 (12 月帝
京大学担当、1 月淑徳大学担当、
3 月神奈川大学担当、5 月古俣氏
担当) について確認がなされた。

第 187 回全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

日 時 2019 年 12 月 19 日 (木)
13 時 00 分～ 13 時 30 分

会 場 国立大学法人電気通信大学 東 3
号館 (総合研究棟) 3 階 306 号室

出 席 國學院大學 神奈川大学 大東文化
大学 帝京大学 東海大学 武蔵野
美術大学 明治大学 立教学院

議 題 (1) 2019 年度総会ならびに全国研
究会総括

・会計校 (東海大学) より、2019
年度全国総会・研究会の収支総括
の報告がなされた。

(2) 2019 年度研究会について

・事務局 (立教学院) より、次回
(第 118 回) 研究会の日程 (2 月
3 日) と場所 (千葉経済大学・地
域経済博物館) の確認がなされ
た。

・担当校 (神奈川大学) より、第
119 回研究会の日程 (3 月 2 日)
と場所 (神奈川大学横浜キャン
パス) の確認がなされた。また、同
研究会を神奈川大学史研究会との
合同開催としたい旨の申し入れが
なされ、了承された。

(3) 創立 30 周年記念事業について

・立教学院より、創立 30 周年記念
展の図録刊行、および印刷費、展
示製作費の費用分担について説明
がなされた。

・会計校 (東海大学) より、創立
30 周年記念事業関連経費の会計
状況について報告がなされ、了承
された。

(4) 2020 年度東日本部会総会につ
いて

・事務局（立教学院）より、2020年度の東日本部会総会について、5月28日（木）、法政大学で開催予定である旨、報告がなされた。

(5) その他

・編集担当（國學院大學）より、会報（第61号）を年内に発行・発送予定である旨、報告がなされた。

第188回全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

日時 2020年2月3日（月）

13時00分～13時40分

会場 千葉経済大学 1号館208教室

出席 神奈川大学 淑徳大学 大東文化大学
帝京大学 東海大学 日本大学
立教学院

議題 (1) 2019年度研究会について

・3月12（木）開催予定の研究会について担当校（神奈川大学）より報告がなされた。当日の全体討論では、日本大学（兼司会）と東海大学からも簡単な事例報告がなされることとなった。

(2) 2020年度東日本部会総会について

・5月28日（木）開催予定の2020年度東日本部会総会（法政大学）について、事務局（立教学院）より報告がなされ、当日のスケジュール等の確認がなされた。

(3) 2020年度全国研究会について

・事務局（立教学院）より、日程および会場等について報告がなされた。

(4) 2020年度役員改選について

・2020年度役員改選について話し合われた。次回、改めて検討することとなった。

(5) その他

・会計校（東海大学）より、『研究叢書』第20号とウェブシステム関連の会計報告、および年会費の納入状況について報告がなされた。

・編集担当（大東文化大学）より、会報（第62号）の進捗状況について報告がなされた。

全国大学史資料協議会
東日本部会研究会記録

全国大学史資料協議会 2019年度研究会
（第116回全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録）

テーマ 「新制大学発足をめぐる各大学の動向—その資料と活用—②」

日時 2019年10月17日（木）～18日（金）

会場 立教大学池袋キャンパス

太刀川記念館3階 カンファレンス・ルーム

（2019年10月17日）

学習院大学史料館、日本女子大学成瀬記念館等の見学

（2019年10月18日）

出席〈東日本部会〉

愛知医科大学 青山学院 学習院
神奈川大学 慶應義塾 皇學館大学
國學院大學 国士館 自由学園 女子美術大学 聖心女子大学 専修大学 創価大学 大東文化大学 拓殖大学 中央大学 帝京大学 東海大学 東京経済大学 東京農業大学 東邦大学 東北学院 東北大学 東洋英和女学院 富山大学 日本女子大学 日本大学 法政大学 北海道大学 武蔵野美術大学 明治大学 立教学院 立教女学院 立教大学 立正大学 早稲田大学

浅井ふたば 古俣達郎 齊藤浩次
谷本宗生 中村青志 林慎一郎
古郡信幸 細見大作 北村和夫
東日本部会 = 45 会員 61 名

(内訳：40 大学 56 名、個人 5 名)

〈西日本部会〉

大阪女学院 大阪市立大学 大阪大学 大谷大学 関西大学 関西学院 京都産業大学 近畿大学 甲南学園 神戸女学院 常翔学園 西南学院 天理大学 同志社大学 梅花学園 広島大学 福岡女学院 福岡大学 桃山学院 立命館 龍谷大学

西日本部会 = 25 会員 27 名

(内訳：21 大学 24 名、個人 3 名)

総計 = 70 会員 88 名

(内訳：61 大学 80 名、個人 8 名)

開会挨拶 伊藤信明氏(関西大学年史編纂室)

全国研究会テーマ

「新制大学発足をめぐる各大学の動向—その資料と活用—②」

テーマ発題 豊田雅幸氏(立教学院展示館)

報告 1 小枝弘和氏(同志社大学同志社社史資料センター社史資料調査員)

「収蔵資料に見る同志社の新制大学構想」

〔概要〕小枝氏からは、『同志社百年史』(通史編 2 冊、資料編 2 冊、昭和 54 年)編纂時に収集・調査された資料を用いて、同志社における新制大学構想について報告がなされた。本報告では、まず新制大学発足以前のキリスト教主義の復興や神学部の新設などについて言及したのち、同志社における戦前・戦後の比較に際し、アメリカとの関係性に注目して、アメリカン・ボートとの関わりや財団法人同志社大学日米文化財団の活動について紹介された。次に、昭和 21 年 11 月 25 日に設置された同志社臨時教育調査会における一連の議論の過程や理事会における議決過程について解説した上で、新制大学開設に伴い議論された同志社独自の構想として、Senior College と Junior College の実践について紹介された。これらの事例を通して、新制大学発足時の理念と現実との乖離について指摘され報告が結ばれた。

(高野裕基)

報告 2 岸本美香子氏（日本女子大学成瀬記念館学芸員）

「新制大学誕生—日本女子大学の場合」

〔概要〕 岸本氏からは、日本女子大学を事例に同大学の新制大学発足過程の報告が行われた。まず創立者である成瀬仁蔵の人物や教育観などが述べられ、それらが学校の特徴を形作っていることが指摘された。次いで、日本女子大学が高等教育機関として初めてとなる家政学（部）を置いたことが紹介され、学としての構成やその特色などについての説明がなされた。新制大学の発足にあたっては、日本女子大学の場合、女子教育研究会、女子大学連盟、大学婦人協会などの活動があり、同時に GHQ/SCAP の民間情報教育局（CIE）の女子高等教育担当のルル・ホームズらの助言があったという。ホームズはこうした女子大学の成立に深く関わっただけではなく、家政学が新制大学の一学部として認められることを強く主張したほか、家政学の設置基準を定める役割を果たしたことも紹介された。こうした尽力もあって、同大学は 1948（昭和 23）年に新制大学として誕生するに至ったと述べて報告を終えた。

（齊藤研也）

報告 3 入江幸二氏（富山大学人文学部准教

授、富山大学アーカイブ副室長）

「新制富山大学の発足をめぐって」

〔概要〕 入江氏からは、先ず富山大学の前身にあたる戦前の師範学校・薬学校・富山高等学校・高岡高等商業学校・高岡高等専門学校各校の沿革および所在について説明がなされた。ついで新制大学設置に向けての動向について、1947（昭和 22）年から大学設置への運動が開始され、4つの単科大学からなる連合大学案も構想されたことが紹介された。しかし地域ごとに一大学とする政府の指針に従い、文理・教育・薬学・工学の 4 学部からなる総合大学として大学設置認可申請が行われ、1949（昭和 24）年の新制富山大学開設に至ったことが述べられ、翌 1950（昭和 25）年の富山高等学校廃止のエピソード等も紹介された。また報告では、前身校や学部ごとに分散したキャンパスの変遷に重点が置かれ、五福・杉谷・高岡の 3 キャンパスとなった現在でもキャンパスの移転と統合の問題が続いていることが述べられた。加えて自校史授業においてキャンパス史めぐりを行っている事例が紹介された。

（桑尾光太郎）

総括討論

司会 浅沼薫奈氏（大東文化大学）

山本尚史氏（筑紫女学園大学）

パネリスト 小枝弘和氏（同志社大学同志社社

史資料センター社史資料調査員）

岸本美香子氏（日本女子大学成

瀬記念館学芸員）

入江幸二氏（富山大学人文学部

准教授、富山大学アーカイブ副

室長）

〔概要〕 総括討論は、司会から3報告についてのまとめがあった後、会場へ質問を募る形で始まった。その際、今回と同テーマで開催された2017年度の全国研究会において取り上げなかったこと、または課題となったことについての議論ができればとの提案が司会からなされ、それを受けての質疑応答となった。具体的には、12大学が先行して認可された理由や背景は何か？ 学内において旧制と新制と区別はあったのか？ 教養系の教員に対する配置はどのようになされたのか？ など、積み残しの課題に対する質問がなされた。これらの質問に対して今回の報告者だけでなく、前回の報告者たちからも補足説明が行われた。

「資料と活用」という点については、富山大学における自校史教育の実例紹介のほか、各大学における新制大学関係資料の内容や保存方

法についての質問に対して、同志社大学や富山大学の事例報告などがなされた。また、これからの年史編纂に対するビジョンは？ といった質問もあり、大学史の新たな活用に対する会員の強い関心がうかがえた。

最後に司会からは、旧制・新制大学の質の問題や、入試問題の変化など、今回の報告や討論を終えてもなお多くの課題が残ったことを含め、本テーマの継続の必要性が告げられ、討論を終えた。

（瀬戸口龍一）

閉会挨拶 伴瀬利江氏（明治大学大学史資料センター）

見学会 学習院大学史料館、日本女子大学成瀬記念館等

〔概要〕 全国大学史資料協議会全国研究会3日目の見学会は目白駅に集合し、2グループに分かれ、学習院大学と日本女子大学に向かった。日本女子大学では成瀬記念講堂、成瀬記念館、成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅）を見学。成瀬記念館分館は創立者である成瀬仁蔵が没するまで居住したこともある建物。道路拡張のため、構内の北西隅にあったものを解体し、記念館隣に移築。現在、文京区指定有形文化財となっている。学習院大学では学習院大学史料館で開催されていた「武具展」を見学。そ

の後、学内に遺る石碑や国登録有形文化財である乃木館、前方後円墳型に壇を築いた御榊壇などを見て回った。見学後、それぞれの場所で解散し、2019年度全国研究会は終了した。
(阿久津朋子)

第117回全国大学史資料協議会東日本部会
研究会記録

日時 2019年12月19日(木)
14時40分～16時30分
会場 国立大学法人電気通信大学
東3号館(総合研究棟)3階306号室
出席 神奈川大学 國學院大學 専修大学
大東文化大学 中央大学 帝京大学
東海大学 東京農業大学 武蔵野美術大学 明治大学 立教学院 立教女学院 早稲田大学
齊藤浩次 谷本宗生 中村青志 林慎一郎

会長挨拶 村松玄太氏(明治大学史資料センター)

司会 堀越峰之氏(帝京大学総合博物館)
講演 由良憲二氏(電気通信大学副学長・UECコミュニケーションミュージアム館長)

「電気通信大学のあゆみ・UECコミュニケーションミュージアム設立の経緯と活動」

見学 UECコミュニケーションミュージアム
〔概要〕本研究会では、会長校である明治大学村松氏より挨拶がなされた後、

UECコミュニケーションミュージアム館長の由良憲二氏より講演を頂いた。初めに無線電信従事者の育成を目的として設立された無線電信講習所(1918年)の創立に起源を持つ電気通信大学の歴史の概要をお話し頂いた。続いて、学内に残された通信機関係等を一般に公開しているUECコミュニケーションミュージアムの設立とその活動について報告頂いた。講演の後、同ミュージアム学術調査員の方々より展示物の解説を受けながら同ミュージアムの見学を実施した。展示物は同大学のルーツとなる無線通信関係機器のコレクションを始めとして、カシオ製リレー式計算機AL-1(1962年製造)や蓄音機など、動作可能な状態で展示されているものや、膨大な真空管のコレクションなど同大学ならではのものである。あわせてそれらを活用した一般向けのイベントについても紹介があった。理系の国立大学での大学史資料の活用の事例と公開方法の一例として大変参考になる研究会であった。
(堀越峰之)

第118回全国大学史資料協議会東日本部会
研究会記録

日時 2020年2月3日(月)

14時00分～16時00分

会場 千葉経済大学 1号館208教室

出席 神奈川大学 淑徳大学 大東文化大
学 帝京大学 東海大学 東京経済
大学 日本大学 明治大学 立教学
院 立教女学院

中村青志 齊藤浩次

会長挨拶 村松玄太氏(明治大学史資料セン
ター)

司会 桜井昭男(淑徳大学アーカイヴズ)

講演 菅根幸裕氏(千葉経済大学地域経済
博物館)

「千葉経済大学地域経済博物館につ
いて」

見学 「波打ち際の宝石たち—D・Mギル
フォイルの上総興津浜で二十年にわ
たる陶片の蒐集—」

館収蔵資料

千葉県指定有形文化財「旧鉄道聯
隊材料廠煉瓦建築」

〔概要〕 本研究会では、まず会長校である明
治大学村松玄太氏より挨拶があった
後、千葉経済大学地域経済博物館館
長の菅根幸裕氏より「千葉経済大
学地域経済博物館について」という講
演をいただいた。内容は、千葉経済
大学博物館の設立の経緯とその後の
運営状況、そして学生の博物館実習
にかかわる地域連携の実践について

具体的な説明がなされた。経済大学
における地域博物館の在り方につ
いて試行錯誤を経験されるなかで、博
物館が地域経済の活性化のためにで
きることは何かということにつ
いて、学生中心の実践をおこなってい
るという説明が印象的であった。「波
打ち際の宝石たち—D・Mギルフォ
イルの上総興津浜で二十年にわたる
陶片の蒐集—」は、上総興津浜にう
ち上がった縄文から近世におよぶ陶
磁器片を紹介するもので、その多様
性には目を見張るものがあった。ま
た館の収蔵資料の保管状況につ
いても見学した。キャンパス構内にある
千葉県指定有形文化財「旧鉄道聯
隊材料廠煉瓦建築」は、2011年の
東日本大震災で大きな被害にあった
ため、内部に立ち入ることはできな
かったが、外から内部の状況をうか
がったところ、かつて鉄道のレール
が保存されていた広いスペースや特
徴的なアーチ構造が見て取れ、今後
の管理・保存の必要性を感じた次第
である。(桜井昭男)

全国大学史資料協議会東日本部会
 会員名簿 (2020年1月31日現在)

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 愛知医科大学 アーカイブズ・医学情報センター (図書館) | 25 聖路加国際大学 大学史編纂・資料室 |
| 2 愛知大学 東亜同文書院大学記念センター (豊橋研究支援課) | 26 専修大学 大学史資料室 |
| 3 青山学院 資料センター | 27 創価大学 創価教育研究所 |
| 4 跡見学園女子大学 IR・大学資料室 | 28 大東文化大学 大東文化歴史資料館 (大東アーカイブス) |
| 5 お茶の水女子大学 歴史資料館 | 29 拓殖大学 創立百年史編纂室 |
| 6 学習院 学習院アーカイブズ | 30 玉川大学 教育博物館 |
| 7 神奈川大学 大学資料編纂室 | 31 多摩美術大学 大学史編纂室 |
| 8 関東学院 学院史資料室 | 32 中央大学 広報室 大学史資料課 |
| 9 国立音楽大学 校史資料室 | 33 津田塾大学 津田梅子資料室 |
| 10 慶應義塾 福澤研究センター | 34 帝京大学 帝京大学総合博物館 |
| 11 恵泉女学園 史料室 | 35 東海大学 学園史資料センター |
| 12 皇學館大学 研究開発推進センター | 36 東京家政大学 広報連絡会議 (総務部総務課) |
| 13 國學院大學 校史・学術資産研究センター | 37 東京経済大学 図書館・史料室 |
| 14 国際基督教大学 歴史資料室 | 38 東京女子医科大学 史料室・吉岡彌生記念室 |
| 15 学校法人国士館 国士館史資料室 | 39 東京女子大学 大学運営部総務課 大学資料室 |
| 16 国立女性教育会館 情報課 | 40 東京電機大学 総務部 (企画広報担当) |
| 17 駒澤大学 禅文化歴史博物館大学史資料室 | 41 東京農業大学 図書館事務課 |
| 18 芝浦工業大学 経営企画部企画広報課・図書館 | 42 東邦大学 額田記念東邦大学資料室 (法人本部経営企画部) |
| 19 自由学園 自由学園資料室 | 43 東北学院 東北学院史資料センター |
| 20 淑徳大学 淑徳大学アーカイブズ | 44 東北大学 史料館 |
| 21 上智大学 史資料室 | 45 東北文化学園大学 図書館事務室 (学園史編纂室) |
| 22 女子美術大学 歴史資料室 | 46 東洋英和女学院 史料室 |
| 23 成城学園 教育研究所 (成城学園百年史編纂室) | 47 東洋学園大学 東洋学園史料室 |
| 24 聖心女子大学 総務部 | 48 東洋大学 井上円了研究センター・井上円了記念博物館 |
| | 49 獨協学園 獨協学園史資料センター |

- 50 富山大学 アーカイブズ・総務部アーカイヴ事務室
- 51 南山学園 南山アーカイブズ
- 52 日本女子大学 成瀬記念館
- 53 日本体育大学 図書館
- 54 日本大学 企画広報部広報課
- 55 フェリス女学院 資料室
- 56 法政大学 法政大学史センター
- 57 北海道大学 大学文書館
- 58 武蔵学園 記念室
- 59 武蔵野美術大学 法人企画グループ法人企画チーム 大学史史料室
- 60 明海大学 浦安キャンパス メディアセンター（図書館）
- 61 明治学院 歴史資料館
- 62 明治大学 大学史資料センター
- 63 明星大学 明星教育センター
- 64 立教学院 立教学院展示館
- 65 立教女学院 資料室
- 66 立教大学 立教学院史資料センター
- 67 立正大学 学長室大学史料編纂課
- 68 早稲田大学 大学史資料センター

以上機関会員 68・個人会員 34・名誉会員 6

ご案内

全国大学史資料協議会および同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

【立教学院 立教学院展示館】

〒171-8501

東京都豊島区西池袋 3-34-1

☎ 03-3985-4841

【日本大学 企画広報部広報課】

〒102-8275

東京都千代田区九段南 4-8-24

日本大学会館8階

☎ 03-5275-8444

会報編集

【大東文化大学 大東文化歴史資料館】

〒175-0083

東京都板橋区徳丸 2-19-10

☎ 03-5399-7646